

## イギリスへ渡った茶 (3)

富山 八十八 (とみやま やそや)  
元ブルックボンドハウス総支配人

### イギリスの政治情勢

1603年にヴァージン・クイーンのエリザベス女王が没するとスコットランドからジェームズが迎えられジェームズI世となった。王朝はチューダー家からスチュアート家となった。

ジェームズI世は王権神授説を唱えてイギリス議会との関係がうまく行かなかった。次いでジェームズI世の長男チャールズI世が即位すると議会との関係はさらに悪化した。

議会は「権利の請願」を王に提出して国民の権利保護と王権の濫用を制限した。王と議会との関係は悪化して内乱となり、クロムウエル指揮の軍が国王軍を破り1649年にチャールズI世は処刑された。「ピューリタン革命」である。

クロムウエルは護民官に就任して厳格なピューリタニズムに基づく政治を実施した。クロムウエル没後に彼の子のリチャードが護民官となるが難局を乗り切れず、議会は10年続いた共和制を廃して、フランスに亡命中の処刑されたチャールズI世の長男チャールズII世を迎えて「王制復古」となった。

### イギリス東インド会社の変容

イギリス東インド会社は1601年の第1回航海から1613年の第12回航海まで、1航海ごとにすべてを清算する「個別航海」方式を採ったがオランダ東インド会社のような順調な成果を挙げることができなかった。

オランダ東インド会社の資本金はイギリスの10倍以上であり、株主の責任は出資範囲内の有限責任、会社は個別航海ごとの清算ではない永続的な性格だった。重要な交易拠点には商館を設け、現地の情報収集や交流をはかり物産を集貨するにも有利であり、持ち込んだ商品を一度に売り捌く必要もなく有利にビジネスを進めることができた。

かたやイギリス東インド会社は資力で劣り出

資はなかなか集まらず、交易は港から港への単発的なものであるから集貨に困難があり、航海隊同士が競合することもあった。国内では当初の目的であったイギリス産毛織物の輸出が振るわず、逆に銀が持ち出されることに対する非難も起きた。

**合本航海** そこでイギリス東インド会社は数航海を一つにまとめた航海を行うことになった。これによって「合本 (Joint Stock)」企業として資力も増し、1航海ごとの清算から長期的な交易となった。1613年の第1回合本は成功で、続いて1642年まで合本航海は4回行われた。

東インドではポルトガルの優勢はオランダ、イギリスの進出で退潮をしめし、代わってイギリスはオランダと激しい競争を展開する。

こういう状況のなかで1619年、イギリス、オランダ両東インド会社の間で両社合併の協定が結ばれた。ムダな競争を止めて両社による交易の独占をはかろうとするものである。これによって現地での香辛料の買いつけ競争による買値の値上がりを防ぎ、ヨーロッパでの販売競争を止めて売値の低下を防ごうとするものだった。しかし両社の東インド現地での反対は激しかった。

そこへ1623年に高級香辛料産地であるモルッカ諸島で「アンボイナ島の虐殺」事件が起こりイギリスはこの地方から撤退する。同年、日本でも交易不振で平戸商館を閉鎖した。

イギリス国内では「ピューリタン革命」で共和制となってクロムウエルが護民官になった。

チャールズI世はコートン会社に東インド貿易を許可したりしたのでイギリス東インド会社の貿易独占は侵され利益の確保が困難になっていた。

**クロムウエルの改組** そこで議会は1657年、イギリス東インド会社に新たな特許状を交付した。「クロムウエルの改組」といわれる。会社

は近代的な株主総会での投票による経営の意志決定が行われ、永続的な会社として再出発した。

**英蘭戦争** クロムウエルはまた1651年に「航海条例」を発して外国船には自国の産物以外の品物をイギリスへ持ち込むことを禁じた。この法の真の狙いは海運界を牛耳っていたオランダ船を排除するもので、この結果イギリス・オランダは戦争となる。

戦争は1652年の第1次から3次わたって戦われた。

チャールズ2世時代の第2次戦争ではオランダ軍艦がテムズ川に攻め入ってロンドン港が閉鎖され、1664年にはイギリス海軍が新大陸のオランダ植民地ニューアムステルダムを占領して時の海軍大臣ヨーク公、後のジョージ2世の名から「ニューヨーク」と改名した。

第3次は1672年のオランダ・フランス戦争にイギリスが便乗してフランスと同盟したもので、フランス勢力を利用して東インドでのイギリス勢力の挽回をはかりたいイギリス経済界の要求があった。結局オランダは航海条例を承認することになる。

1657年から再出発したイギリス東インド会社船が多数アジアへ向けて出港した。40年前と較べると日本、シャム、ボルネオの商館はなく、ジャワ、モルッカ諸島は縮小したのに対して、インド各地特に西側のコロマンデル海岸と東側のベンガル地方の商館の重要性が飛躍的に増加した。

### コーヒーハウス

イギリスで茶が飲まれるようになるのはオランダから40年ほど遅れた17世紀の中頃、コーヒーハウスと宮廷からであった。

1650年、オックスフォードに「コーヒーハウス」が出現した。レバノンからやってきたユダヤ人のジャイコブが開いたものだった。

もともとコーヒーの原産地はエチオピアで、コーヒーはイスラム圏で神に祈りを捧げる際に眠気を払うために飲まれていた。

1554年にオスマントルコの首都イスタンブールにコーヒーハウスが開店して新しい社交の場として広まった。中世以来の身分制が厳しいなかで階層を問わずだれもが自由に出入り

きた。

イギリスでのコーヒーハウスはロンドンには1652年以降に出現し急速に広まっていった。

入口に「アイドル」と呼ばれた若い女性が座っていて入場料1ペニーを払って中に入る。飲みものはコーヒー、茶、チョコレートなどその頃舶来された珍しいノンアルコール飲料で、値段はいずれも1ペニー。アルコール類はない。当時はピューリタン革命期でもあった。

発行部数が少なく高価だった新聞、雑誌が置かれていて自由に読むことができた。字の読めない者にはだれかが読んでくれる。部屋にはタバコの煙がすさまじい。これがコーヒーハウスの特徴だった。

夏目漱石はイギリス留学から帰国して東京帝国大学英文科の初の日本人教授として1年間、18世紀の英文学を講じるが、それをまとめた『文学評論』（岩波版『漱石全集』第10巻）で「4. 珈琲店、酒肆及び倶楽部」としてコーヒーハウスについて詳しく述べている。それほどまでにコーヒーハウスがイギリス史の上で重要であったことが理解される。

コーヒーハウスは身分を超えていろいろな人が出入りし、情報交換や経済取引の場となった。

ここから新聞や雑誌のジャーナリズムが、政党が、郵便制度が、王立学士院などが生まれていく。ロイド・コーヒーハウスでは船荷その他の保険を人びとが分散して引き受ける制度が生まれた。

船舶や積荷の保険を引き受けるにはたいへんな危険を伴うので引受手を捜すのが大変だった。そこでロイド・コーヒーハウスでは具体的船舶や積荷の保険を分散して引受人を募り、引受人の人が下欄に署名した。引受人は「あんだーライター」と呼ばれた。この制度から巨大な「ロイズ保険機構」が生まれた。

時代はピューリタン革命、1660年の王政復古、1688年の名誉革命と政変が続きこれに支持や反対の意見が沸騰していた。

オランダとの3度にわたる戦争、海外貿易による経済の活況とブルジョワ層の台頭、経済界のバブルと不況など社会は揺れ動いていた。

1658年9月に初の茶に関する広告が新聞に掲載された。「サルタネス・ヘッド」コーヒーハ

ウスのもので、すべての医師が証明した健康的な飲みものである茶を販売していると述べている。

「ギャラウエイ」コーヒーハウスが店内に貼り出した広告では、茶は40近い症状に有効であると列挙している。いずれも茶の薬効面が強調されたものだった。

中世以来あらゆる職業は「ギルド」制に縛られていた。貿易商であれ鍛冶屋であれ何らかの職業につく場合には徒弟として年期奉公を積み、熟練者となって一人前として給料をえる。さらに腕を磨いて親方となって独立する。

徒弟入りには礼金を払う。貿易会社や卸売業など有利な職業は礼金が高く、鍛冶屋や大工などの場合は低い。高い礼金を払えるのは貴族の次男、三男や裕福な家の子弟だった。

だれもがコーヒーハウスに入れるとしても商店主やギルドの親方、弁護士、医師、官吏、聖職者などある程度以上の所得のある者だった。

コーヒーハウスが女性を排除したことに対して女性たちは1674年に「コーヒーハウス反対の請願デモ」を行った。「かの乾燥させ、衰弱させる飲みものの過度の飲用によって男性を不能者にし、女性たちのセックスに生じる巨大な不都合を公共の思慮に訴える」という過激なものだったが、コーヒーハウスの入場料と飲みものの代の合計2ペンスあれば1日の食費が賄えると訴えていた。

**茶税** コーヒーハウスが繁盛したのに反してタバコ（居酒屋）やエールハウスなどが寂れていった。政府は酒税の不足を補うこともあって、コーヒーハウスを免許制とし、そこで売られるコーヒー、茶などに課税した。後々、茶の消費と密接な関係をもつようになる茶税がここで登場した。

1669年にイギリス政府はオランダからの茶の輸入を禁止、茶の供給はイギリス東インド会社が独占することになった。

**クラブ** 1720年代を境にコーヒーハウスはそれまでの開放的な場から、客をしぼった閉鎖的な「クラブ」へ変貌していく。1714年には8000軒ともいわれたコーヒーハウスは1739年には551軒になっていた。

### イギリス宮廷の茶

**キャサリン・オブ・ブラザンガ** 1662年チャールズⅡ世は王妃にポルトガルの皇女キャサリン・オブ・ブラザンガを迎えた。縁談は早くから決まっていたがチャールズⅡ世の亡命で棚上げになっていたものだった。

キャサリンは持参金として北アフリカのタンジールとインドのボンベイ（ムンバイ）をチャールズⅡ世に譲渡した。両方ともイギリスにとっては重要な戦略地点となる。

タンジールはモロッコ北部、ジブラルタルと相対する地中海の要衝であり、ボンベイはイギリス東インド会社の重要な拠点となる。

さらにキャサリンは船のバラスト（船の安定をはかるために船底に水を入れること）の代わりに銀塊を持参するとのことだったが、銀塊はなく砂糖を積んできた。砂糖は茶同様に貴重品であったが、ポルトガルはブラジルで砂糖栽培に成功していたのだ。砂糖キビの原産地はインドである。

ポルトガルはバスコ・ダ・ガマがインドに到達してから毎年船団をインドに派遣していた。ルートはアフリカ西岸沿いであるが第3回目の船団の一部が航路を外れて南米に到着してしまった。その場所がコロンブスの西インド諸島到達によってポルトガル・スペイン両国が1493年に取り決めた「トルデシヤス条約」によるポルトガル領に属することになった。これがブラジルで、ポルトガルはこの地でインドの砂糖キビ栽培に成功していたのだった。

キャサリンは母国でのお茶を飲む習慣をそのままイギリス宮廷に持ち込み、持参した中国の赤い磁器製のポットやカップを揃え、中国風の飾り付けをした部屋で女官や貴族の女性たちに茶を振る舞った。彼女が結婚した年、彼女の24歳の誕生日を祝っての桂冠詩人エドモンド・ウォーラーが捧げた幸詩には、彼女が茶を振る舞うさまを詠っている。

その頃イギリス宮廷での正式の飲みものは女性でもワイン、エールなどのアルコール飲料だったから「酔わない飲みもの」で中国から舶来した高価な茶に、これも高価な砂糖を加えて飲むのは選ばれた者だけのステイタス・シンボルであった。こうして貴族や上流婦人の間に喫茶が広まっていった。